

の関係がU字型を示すことが報告されている。しかし、日本には、この点についての疫学研究がない。

【対象】人間ドックを受診して文書で研究に同意した男性3,375人と女性2,069人。

【方法】血清総ビリルビン値の五分位数で分類した各群について、冠動脈疾患と脳卒中の頻度と、血清総ビリルビン値の最小群を基準としたオッズ比を計算した。血清総ビリルビン値を従属変数とし、心血管危険因子を独立変数とした多変量線形回帰を計算した。

【結果】男性では、冠動脈疾患の年齢、喫煙補正オッズ比が第3五分位群で、脳卒中の年齢、喫煙補正オッズ比が第4と第5五分位群で、第1五分位群に比べて有意に低かった。女性では有意差が見られなかったが、脳卒中のオッズ比は第2から第5群で、第1五分位群に比べて低い傾向が見られた。血清総ビリルビン値は、男女とも、ヘモグロビンA1C、高感度CRP、中性脂肪と負に、HDLコレステロールと尿酸に正に関係した。

【結論】ビリルビンは心臓血管病に関係することが示唆された。

【限界】対象数が少ないことと、診断が問診のみで、客観的根拠がないことが限界であるが、こうした攪乱因子は有意差を隠ぺいする方向に作用すると考えられるので、本研究の結果は、ビリルビンが心臓血管病に関係することを示唆すると思われる。

【臨床的示唆】これまでの抗酸化ビタミンの介入試験では、心臓血管病予防効果は否定的であるが、血清総ビリルビン値の低い群は、生体が酸化ストレスに曝された状態を反映している可能性があるため、対象をこの群に限定した介入試験は、試みる価値があると思われる。

7 アミオダロンは抗不整脈効果に依存せず心不全に対して有効である

田村 真

聖園病院

〔症例1〕85歳、男性。OMIによる心不全で一

年に数回入院を繰り返していた。UCG上EF＝10%であった。心不全(CHF)で当院に紹介入院時のモニターでVPCが多発しており、アミオダロン(AMD)100mgを投与した。VPCは消失し、CHFも改善し、退院した。6ヵ月後、CTで軽いIPの所見を認め、AMDの投与を中止した。中止後もCHFの再発もなく、投与開始から約3.5年後に脳出血で死亡するまでCHFによる入院はなかった。

〔症例2〕90歳、男性。ARⅣ°、NYHAⅢ～Ⅳ°で経過していた。起座呼吸で当院に紹介入院時BNPは2677pg/ml。UCG上LV径は8.5/7.2cmと拡大しており、突然死のリスクが高いと考え、AMD100mgを開始した。以後食欲不振で一回入院したが、CHFによる入院はなく、4年経過した。

94歳の現在外来通院中である。直近のBNPは352pg/mlであった。AMDは抗不整脈効果と関連しない抗心不全効果を有し、かつ高齢者にも有効と考えられた。突然死のリスクの高い心不全患者に対する治療戦略においてAMDの有用性が示唆される。

8 感染性心内膜炎による僧帽弁閉鎖不全症で術前発作性心房細動を繰り返した1例に対する治療

金子 夏美・堺 勝之・渡辺 達

田村 雄助・菅川 正和*・福田 卓也*

諸 久永*・田山 雅雄**

済生会新潟第二病院循環器内科

同 心臓血管外科*

同 救急科**

【背景】感染性心内膜炎の治療は、抗生剤による治療が中心となるが、心不全や感染がコントロール不可能な症例が手術適応となる。今回我々は、心不全のコントロール不良にて、発作性心房細動が生じたため手術を早めた症例を経験したので、文献的考察を含めて、報告する。

症例は52歳、女性。

【現病歴】2010年3月上旬齲菌が自然に抜けた